

「あっ♡ん♡も、きもちいのやだあゝ……っ♡」

もう何度イカされたのだろう。

何度も何度も繰り返し絶頂の感覚を叩き込まれた体はほんの僅かな息遣い、手の動作さえも容易に刺激を拾って快感に昇華させてしまう。今も剥かれて無防備になったクリの先っぽを指先でとんと♡とされるだけで甘イきで体が痺れる。逃げようともがいても彼の大きく逞しい腕の中ではひとたまりもなく、ずっと体を固定されてひたすら快感を送り込まれる。

「おい、もう勝手にイくなつて言つたろ。クリいじめられるとすぐイっちゃうな、あんたのころまんは」

「ゝお……っ♡♡」

耳元で囁かれる吐息と声がぞくぞく♡と背筋を粟立たせて無意識におまんこに力が入った。中に入る彼の熱くて大きいおちんぽを、きゅうっ♡と締め付ける。

「うぁ……っ♡おちんぽ、おっき……♡」

私のまんこが彼のおちんぽに吸い付いて、もっとダイレクトに熱と硬さが伝わって子宮にぞくぞく響いた。おまんこの中がばんばん♡になるくらいおっきいおちんぽがびくびく♡と脈打つのが分かる。そんな少しの刺激でも背筋がのけ反ってしまう私の体はすっかり彼から与えてもらう快樂に堕ちてしまっている。

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ♡

そうしている間にも彼の指はずる剥けでびんびんに本氣勃ちしたクリを摘んで器用にこしゅこしゅ♡と扱きあげる。既にびちよびちよに濡れそぼっているおまんこの汁が潤滑油のようになっいて、まるで雄ちんぽしこしこオナニーみたい…♡

「んお…っ♡お、ほ、おお…っ♡クリちんぽちゅこちゅこ♡らめ♡や、ずっとイッチャう♡勝手にイきましたゅ♡ごめんなしゃ…っ♡♡♡」

ぐっぽりと彼のおちんぽを呑み込む私のおまんこから、びゅっびゅ♡びゅ…っ♡と勢い良くイキ潮が噴き出した。否応なしに好き放題されることと言いつけを守れなかった背徳感でさらにマゾ心を煽られて興奮してしまう。

（ おっ…♡謝罪アクメきもちい…♡♡ ）

「あゝ…潮まで嘖いて…。どえろい言葉まで覚えて、恥ずかしいな。最高にエロくて最高に俺の好みだよ♡」

「んあ…♡んむ…♡んゝ…♡」

喘ぎ声しか漏らせないだらしく空いた私の口に彼の指が挿れられた。私は無意識にその指を咥えてちゅぽちゅぽ舌と唾液を絡めて求愛する。

ちゅぶ♡ちゅば♡ちゅ、ちゅ…♡♡

「んむ…♡指ちんぽ、おいひ…♡♡」

「そうだ、指に舌を絡ませろ。…♡ん、上手いな…」

耳元で響く褒め言葉に胸が弾む。

私、褒められた…？嬉しい…♡もっと好みにになりたい…♡そう思えば思う程おまんこも切なくなつて腰をへこへこ♡動かしちゃう…♡♡

「これからもっと、あんたのことドスケベでもちいことしか考えられなくなる俺好みの女に仕込んでやるからな…♡」

——どちゅんっ♡

ずっとハメるだけで動いていなかったおちんぽで容赦なく最奥まで挟られる。

ぱちゅ♡ぱちゅん♡どちゅ♡どちゅっ♡ぬちゅ♡ぬぷっ♡

ひと突きごとに子宮ごと貫かれる感覚に意識を持って行かれそうになる。私の体よりも一回りも二回りも大きい彼の体はもちろんおちんぽだって同じだ。

私は抵抗する力も…：ううん、最初からそんな意思はない。こうして彼に揺すぶられるのが最高に気持ちよくてはしたなく腰を振ってしまっている…♡もっとおまんこいじめてほしい…っ♡

（あれ？でも私、なんでこんなことになってるんだろう…：？）

快楽と恋慕でぐちゃぐちゃのふわふわになった頭でぼんやり過ぎる疑問。

私、おまんこきもちよくなりに来たんだっけ…？

ううん、そんなはずない。

元々こんな…恥ずかしいえっちなんてしたことなくて…。

…そうだ、私、本当はダイエットしようと思ってジムに――。

会社の方針でリモートワークの比率が増えたは良いものの、ほとんど家を出なくなった反動で体重が増えてしまったのが全ての始まりだった。

リモートワーク自体は楽で助かるのだけど、たまの出社の日に穿くスカートがきつくなつて来て……。そうして太ってきたのが原因で、半年前に恋人にも「ぽっちゃり過ぎる」と振られて、余計に休日も部屋に籠りがちな生活になってしまっていた。そんな日々が続いて、つい先日久々に体重計に乗ったら驚く数字になっていたのだ。

現実逃避でたまにしか体重計に乗らない生活が、こんなに悪影響を及ぼすとは……。このまま放っておいては取り返しがつかなくなる。私の本能がそう訴えかけて来る。

（もう、痩せるつきやない……！ 痩せて可愛くなって、振ってきた元彼も見返してやる……！）

そうなれば早速ダイエットだ。と言っても、今までの経験から食事量を減らしただけではリバウンドが怖いし、かと言ってマシンだけが置いてあるジムではサボっちゃうし……。

（もう、今まで通りの中途半端なダイエットじゃダメかもしれないなあ……）

そんなことを悶々と思っていると、丁度眺めていたSNSのリールで流れてきた広告に目を奪われた。

（パーソナルジム……コレだ！）

まさに青天の霹靂。……というのは言い過ぎかもしれないけど、コレしかないと思った。一人じゃ頑張れないし、有人ジムでも自分から声をかけるのが面倒だし、一對一のパーソナルトレーニングなら逃げ道もない。それに私の悩みに合わせて指導してもらえる。誰かに管理してもらった方が楽！……料金はちょっと高いけど…。

でも、今の体重を考えたらそう悠長なことも言っていられない。このジムは私の家からもそう遠くないし、今こうして出会ったのも何かのご縁。私は自分の気が変わらない内に体験見学の予約をスマホで申し込んだのだった。

『今度こそ生まれ変わるぞ！』と言う熱い意気込みを胸に、体験見学の当日を待った。

「あの……15時から見学の予約をした者ですが……」

「ああ、お話は伺ってます。お待ちしてました」

パーソナルジムって言うから、もっと意識の高い、爽やかすぎて逆にむさくるしい人なんだと思ってたのに、現れたのは意外にも清潔感のあるイケメンだった。

黒いトレーニングウェアの上からでも分かる広い肩、厚い胸板、太い腕。しかも身長もかなりある……？多分私と30センチは違うかな？185センチくらいはありそう。真正面に立つと顔を見るために首を反らさなければならぬ程に目線が違う。

髪型は少し長めのセンターパート。前髪の隙間から覗く切れ長の目にしっかりとした眉毛。髪の毛がしっかり長めの黒色をしているからか、肌が余計に綺麗に映えている。筋トレすると肌ツヤが良くなると聞いたことはあるけど、そういうこと……？顔立ちの方も鼻も筋が通っていて凛々しい。いわゆる狼系のイケメンというやつだ。

無表情で黙っているとちよつと怖いかもしれないけど……正直、めっちゃくちゃタイプでかい。いい。挨拶の時の声も、低いのに耳馴染みのする綺麗な声質だ。もう、何もかもが素敵で現実なのかさえ疑わしい。前の彼氏と別れてから、ずっとトキメキも何もなかった生活が、一気

に過去のものになったよう。我ながらゲンキンだとは思いますが、かなりモチベーションが上がってきた。

「こちらに。まずはカウンセリングから始めましょう」

そんなことを考えている内に、奥のカウンセリングルームに案内される。簡易的な仕切りで区切られた中のひとつのブースに案内され、対面する形で椅子に座った。

（うーん…、正面から見ても綺麗な顔だなあ……）

「あの、聞いてます？」

「ひっ…！？す、すみません……」

まさか顔に見惚れてたなんて言えるはずがない。こういうところ、本当に気をつけなくっちゃ。そうだよ、元々私は痩せるために入会しようとしてるんだし、トレーナーさんがいくらかっこよくても別に付き合うとかないし…、どうせお似合いの綺麗な彼女さんがいるんだろうし……。

「今回の体験見学を担当する一ノ瀬です、よろしくお願いします」

「よっ、よろしくお願いします……！」

慌てる私とは真逆で落ち着いた様子で、一ノ瀬さんは軽く頭を下げた。私も慌てて頭を下げて応えた。

顔を上げた彼は私の顔から胸元、それから身体のラインへ視線が這う。きっとこれも仕事上の観察なのだろうけど、服の裾を引っ張って身構える。

（……やっぱり太ったの、分かるのかな。こんな格好いい人に見られるなんて……うう、体型管理サボるんじゃないかった……）

そう思って俯いた私を見て、一ノ瀬さんが僅かに目を細めたことには気付かなかった。それから、彼は私が項目を埋めたカウンセリングシートをタブレットに映しながら淡々と話を始めた。

「ジムに来た目的は……ダイエット、ですか？」

「はい、最近リモートワークが多くてそれで運動量が落ちちゃって……」

「ああ、なるほど。そう言った方も多くいらっしやいます。しっかりと実績に基づいたトレーニングをご提案しますのでご安心ください。特にどの部位が気になってるんですか？」

「上半身とか、太ももとか…。元々こちら辺はむちむちしてたんですけども、太ったら余計に気になっちゃって。……実は前の彼氏にもぽっちゃり過ぎるって振られて、自分の体にあんまり自信ないんです」

元々胸は大きい方で、腰や太腿に丸みがあるのがずっとコンプレックスだった。少し不摂生になると直ぐにお腹とかに出てきてしまう。我ながら太り易い体質なのだと思う。元彼にも全体的にむちむちしているのを何度も指摘されて、いつしか体のラインが出る服を着ること自体辞めてしまっていた。

「前の彼氏さんに？随分と心の無い言い方ですね」

「いえ、良いんです。確かに私は元々ほっそりしてる方じゃないし…そう言われたって仕方ないって言うか……」

「あまり自分を卑下しなくて良い。あなたはあなた、どんな体型でも同じだ。それに、俺から見ればそのままでも女性らしくて魅力的ですよ」

サービストークだと言うのは分かってても、すごく真面目な顔で魅力的だなんて言われるとその気になってしまう。私って本当に単純な思考回路だなあ……。

「あ、ありがとうございます……」

「俺から見て魅力的でも、理想の体型は人それぞれですからね。その理想に近づく為にお手伝いさせていただきます」

そこからは本当にそれらしく話が進んだ。私が何に悩んでいるか、どんな目的でゴールはど
うしたいか、週に何回ペースで来られるか等々……。

「大体の説明は以上ですが……他に懸念していることとか、言っておきたいことはありますか？」

「あ、それなら……学生の頃も文化部で運動自体あんまり得意じゃないんです。運動神経にも自信なくって……。それなら自己流より教えてもらう方が良いかなくて」

「賢明な判断です。自己流で間違ったフォームを覚えてしまうと、遠回りどころか怪我にも繋がりますから。後々フォームを修正するのも大変なので、最初から綺麗なフォームを覚えた方が良い」

「あつ、あとは……私がサボらないように、ある程度縛られて厳しく指導された方が続くかも……？でも厳し過ぎたら着いていけないので飽くまでお手柔らかに……！」

「へえ、縛られて厳しく……ね。そんなに焦らなくて大丈夫です。着いて行けるように教えるのが俺の仕事なので、一緒に頑張って行きましょう」

少しだけ眼差しが険しくなったように思ったが、次の瞬間ふっと口元だけ柔らかくする一ノ瀬さんを見て緊張感が少しだけ解れた。挨拶に差し出された手は大きく、驚くほど優しく穏やかに私の掌を包み込んだ。男らしくてすごく大きい手。骨ばった手の甲には太い血管も見えて遅い。握手ひとつで男の人らしさというか……、雄を感じてしまう。

きつとこの人なら大丈夫そう。直感でそう思った。カウンセリングの段階で、ここに入会する意思是固まっていた。

カウンセリングが終わると、立ち姿勢の確認から始まり体組成計で色々と調べた後に専用の個室に移動した。

普通は別料金だけど、体験の人は特別に個室トレーニングもさせてくれるらしい。新規入会するとまた3日くらい個室トレーニング特典が貰えるらしくて、商売上手だなあと思った。こうして敷居の高い個室トレーニングの契約を増やして行くのだろう。

それから私はマシンの使い方と簡単な自重トレーニングを教えてもらった。一番軽い重量から始めたとは言え、普段運動なんて全然してない私の体には十分過ぎるほどで……。

しかも楽な姿勢に逃げたら直ぐに一ノ瀬さんの指摘が入るから思っていた以上に疲労がすごい。最後のスクワットなんてずっと足がぷるぷるで、明日は確実に筋肉痛だ。

明日の全身筋肉痛に見舞われる私のことを考えて溜息を吐いていると、マットの敷いてあるストレッチブースに手招きされた。

「お疲れ様でした。よく最後まで頑張れましたね。結構途中で音を上げて負荷の再調整をする方が多いので驚きました」

「あ、ありがとうございます……！私なんてまだまだで、着いて行くのに精一杯でした……。でもやるからには最後までやらなきゃって……」

「はは、偉い。自信持つて良いですよ。次の日の筋肉痛を少しでも和らげるために最後にストレッチして終わりましょう。疲労を溜めたままだと筋肉痛も強く出ますから。じゃあ、ここ座ってください」

「絶対明日になったら足やばいですよ」

軽口で疲労感を誤魔化しながら重い腰を指示された場所に落とした。

「大丈夫、ここから少しずつ良くなって行きますよ。ストレッチついでにマッサージもしましょうか。……少し、触りますね」

そう言つて一ノ瀬さんは私の肩に触れた。凝っている場所を的確に指で押してくれる。き、きもちいい……。

「ずっとデスクワークしているとここが凝るでしょう。これからトレーニングで動かしたりして行くと軽減されますよ。あとは……姿勢ですね」

「っ……………！」

一ノ瀬さんの大きな手が無遠慮に肩から背中に落ちて行く。

猫背になりがちな背中を、ぐいと押して強制的に背筋を伸ばされる。なんだか擦ったくて息が漏れる。それから肋骨の方に手が回ってきて……………。

「さて、気になっているのは上半身と太もも辺りでしたよね。まずは上半身からやって行きましょうね」

「え、えっと………は、はい………」

肋骨を触る手がおっぱいの下に触れるか触れないか………つて、一ノ瀬さんはそんなこと考えてないのに！私ったら意識しすぎ………だよね………？

「姿勢、緩んできますよ。ちゃんと伸ばす」

「っ……！す、すみませ……っ」

身じろいで逃げようとした体を大きな両手でがっちり固定される。一ノ瀬さんにそんな気がないのは分かっているのに………おっぱいの直ぐ下を何度も何度も………さすさすされるのが変な気持ちになってしまう。

「それにしても……、綺麗な肉付きをしてる」

一ノ瀬さんの顎が私の肩の上に乗る。より一層近付いた距離で、吐息混じりに語り掛けられ

る声で耳が蕩けそうになってしまっている。

元彼に指摘されていた時は、そこに付いた肉が全部余計なものみたいに思えた。なのに同じ場所を一ノ瀬さんに「綺麗」なんて言われると、自分では嫌いだったはずの身体が、ほんの少しだけ違うものに思えてしまう。

肋骨の付近を撫で摩っていた手指がじわりじわりとお腹の方へ向かう。一番気にしている部位なだけあって、お肉を触られる恥ずかしさで逃げたいのに、一ノ瀬さんの大きい掌がそれを許してくれない。前よりも弾力の良いお腹周りを慈しむように撫でられる。

「あ…えっと、お腹は…！あんまり、自信なくて………」

「例の元彼に何か言われた？」

「あはは……、まあ、はい………」

全くその通りで、元彼にはよくお腹のお肉を摘まれて揶揄われていた。肩越しに私を見詰めてくるまっすぐな瞳に、なんだか全てを見透かされてるような気さえて来てしまう。

「はは、そう身構えないでください。俺のは揶揄う目的じゃなくて、ただ体の様子を確かめているだけですから」

一ノ瀬さんはそう言って腰周りからお腹に手を這わせる。擦ったさで身を振ると、首筋へ一ノ瀬さんの息遣いが掛かって更に擦ったくて堪らない。こんなに近くては意識を逸らすことも出来ない。

元彼の話をしてから撫でる手付きが丁寧……というか、執拗になっている気がする。よく元彼に摘まれていた横のお肉も、一ノ瀬さんは優しく包み込んで撫でてくれる。元彼の記憶と感触が上書きされて行くみたいだ。

すっかり油断している私を見透かしているのか、お腹周りを摩っていた掌が下腹部を目掛けて滑り落ちる。

「わっ……!! ちょ、ちょっと……!」

体のラインを探るようにゆっくりと股の方へ、私の足の付け根を押さえてガバリと開かせた。あまりに恥ずかしい体勢に反射的に足を閉じようとしても、一ノ瀬さんの力が強くて思うようにいかない。

「股関節もしっかり解さないといけないでしょう? ゆっくり、力抜いて」

「うう……………」

私は観念して足の力を緩めた。あくまでストレッチだって分かってるけど……足を全開にするのは恥ずかしい…っ。

「内腿が緊張でだいぶ張ってますね……。念入りに解していきましようか」

「……………っ♡」

一ノ瀬さんの熱い掌が内腿を摩る。それが妙にこそばゆくて、つい肩がピクリと跳ねてしま
う。

「もつと力を抜いて、…身体を俺に全部預けて。ほら、段々体が温まって来たのが分かるで
しょう。…どう？きもちいい？」

「う、あ……………っ♡」

内腿を弄る逞しい手がいつの間にか鼠蹊部にまで達していた。解されるマッサージの心地良
さはあっても…なんか、ちょっと手付きが…えっちなような…？

「ちゃんと俺の手に集中して、感じてください。こういうマッサージは継続が大切ですから、セルフでも出来るように俺の手を覚えて。こうして手が動いて…触れてる部分を意識するんです」

「ひゃっ…♡い、ちのせ…さ……」

耳元で低く囁かれると背中にゾクゾク♡とした快感が伝った。それに…今、変な声を漏らしてしまった自覚がある。

困り果てる私を他所に鼠蹊部の手で足を更に開かれてガニ股のポーズにされてしまう。すると、布生地 of 薄いハーフパンツが張り付いてアソコの形が強調されてしまった。既にじんわりと熱を宿した秘部は布の圧迫感だけでも堪らない刺激を受け取る。このままじゃハーフパンツまで濡れちゃう…！それはまずい…！でも、どうしたら………。

「……はい、マッサージとストレッチはこれで終わり。お疲れ様でした」

（え……？ 終わり……？）

パツと手を離された私はくったりと項垂れてしまった。助かったと思う反面、その先もある

んじゃないかと期待していた自分もいる。

（わ、私ったらなんて変なことを……………!!）

マットの上でもたまたしている私を見兼ねて、一ノ瀬さんは私の手を取って立ち上がらせてくれた。

「…………ジムは、契約されて行きますか？俺にお手伝いさせてもらえたら嬉しいんだけど」

「……………契約、します…………」

「…………良かった、ありがとうございます」

一ノ瀬さんは満足そうに目元を細めると、手元の端末へ視線を落とした。予約表でも確認しているのか、画面の上を長い指が何度か滑っていく。

「次からも俺が見ますね」

「一ノ瀬さんが担当してくれるんですか？」

一瞬だけこちらを見た後、当然のことに頷かれる。

「今日身体の状態も見てますから。その方がやりやすいでしょう」

「あ、確かに……お願いします」

再び端末へ目を落とした一ノ瀬さんは、少し考えるように指を止めた。

「予約は一番最後の回を取っておきますね。その方がゆっくりレッスンに集中出来ると思いますから。じゃあ、また明日。………待ってる」

家に帰って寝る支度を済ませ、ベッドに寝転がっても一ノ瀬さんの声が頭を反芻して離れない。

まさか単なるマッサージであんなに濡れてしまうなんて……。お風呂に入る時もじっとり濡れたパンツを自覚させられて恥ずかしかった…。

自分の痴態を忘れたのに一ノ瀬さんの手を思い出して、また身体が勝手に火照ってしまう。

「あ、ん……………っ♡」

あの時に触られた軌跡を追うように自分の身体に手を滑らせる。元彼と別れてから虚しさが勝ってオナニーなんて暫くしてなかったのに。今は一ノ瀬さんのことを思い出すだけで、こんなにも身体が熱い。

まずは胸の下辺り……………あのまま胸を触られてたらどうなっていたのだろう…。そんなことを考える度に身体がどうしようもなく疼いてしまう。

次に触られたのは……………お股の辺り。太腿をこうして撫でられてから、この付け根まで来たんだっけ。

「いち、のせ…さん……………っ♡」

（こんなこと…しちゃダメなのに…っ♡♡おまんこすりすり♡♡やめられないよお…っ♡♡）

今日会ったばかりの、しかも担当のトレーナーさんにこんなえっちな気持ちを抱くのはどう

かしてる。そう頭で思っても、指は『もしも』を求めて下着の中を潜る。濡れそぼったアソコは期待しているように蜜口をくばくばと開いていた。

にゅぷぷぷ…っ♡くちゅ、くちゅ…♡♡

まずはツン♡と勃起した小さいクリトリスを摩る。そこを皮の上からちよつと擦るだけで充分過ぎる程に濡れてしまうし、気持ちいい。いつものオナニーはクリだけで満足出来ていた。でも、今日は……。

恐る恐る中指を一本挿入して膣の中を擦ってもまだ物足りなくて直ぐに薬指も挿れてしまった。一ノ瀬さんの指はもつと太いんだろうな…。今日握手した時も私の手なんかよりずっと大きかった。指だつてゴツゴツしてて、男らしくて……なんて、どうしてもそんなことが頭を過ってしまう。

そしてもう片方の手はそつと胸に添える。ピンと立った乳首を人差し指と親指で挟んで不器用に、くにくに♡と捏ね回す。

（あの時…こうして、おっぱいも揉んで欲しかったな…♡私のおっぱい、おつきめだけど…一ノ瀬さんの手なら驚掴めるかも…♡ちよつと乱暴に揉みしだかれながら、乳首もカリカリして

もらって…♡それで、下の方も…もっと奥までぐりぐりって…♡♡

ぢゅぷっ♡ぢゅぽっ♡ちゅぷちゅぷ♡ぢゅぷっ♡

もみ♡もにゅ♡カリッ♡こりこり♡♡

「た、足りない…い…っ♡あっ、んん…っ♡一ノ瀬さん♡もっと♡もっと…っ♡」

分かってはいたことだけど、私の指じや奥まで届かない…っ！凄くもどかしい…。でも…一ノ瀬さんなら…♡あの逞しい身体付き…、欲しい奥まで簡単に届くに決まってる…♡抱きしめておちんぼ挿れてほしいっ…♡♡どうしよう、一ノ瀬さんのこと想像してオナニーするの、きもちいいよお…っ♡♡

ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡♡

（想像オナニーしゅごい♡いつもより感じちやうっ♡♡）

ぐちゅっ♡ぐちや♡ぬぷ♡にゅぷ…♡にゅぷ♡♡

夢中で掻き回す内に次々と溢れるえっちなお汁が指に絡まって水音が激しさを増す。一ノ瀬さんの手と温もりを想像するだけでいつものオナニーより何倍も気持ちがいい…♡

「あ♡イク♡イツちゃう♡一ノ瀬しゃ、イツちやいまひゅ…っっ！♡♡」

びくっ♡びく、びくんっっ♡

身体をのけ反らせてイってしまった。まん汁でびちやびちやに濡れたお股から指を引き抜き、荒い息遣いでただ天井を眺める。

「こんなじや明日合わせる顔がないよ……」

知り合ったばかりの一ノ瀬さんをオカズにしてしまったという一抹の罪悪感を覚えながら、私は静かに瞼を閉じた。明日はどうか平常心でいられますように。